清流

題字：芳野 充

令和2年5月30日
第41号

発行所　加来不動産㈱
発行者　加来　寛
北九州市小倉南区守恒本町1-12-23

穏やかに
静かに
清流のように

日常のなかにこそ「ありがとう」

ずいぶん前に、「ありがとう」の反対は「当たり前」、と聞いたことがあります。そのときは「なるほどな」と、かるい受け止め方だったと記憶しています。しかし、最近の新型コロナウイルスの影響で改めて、当たり前の日常のなかにこそ、「ありがとう」や「有り難い」ことがたくさんあるのだ、と思わざるを得ません。

朝、目が覚めることは、有り難い。家族やスタッフが元気で健康なのは、有り難い。きちんと朝昼晩ご飯が食べられることは、有り難い。子どもが学校に行けることは、有り難い。会社があり、そして働けることは、有り難い。給料を払えることは、有り難い。

ふだん当たり前と思っていたことが、じつは当たり前のことではないと思え、そしてこの「当たり前」という考えが、いかに謙虚さのないことなのか、ということも実感します。

わたしが家業の手伝いをはじめて間もないころ、高校生の妹と中学生の弟とわたしと母の4人で住んでいました。父が亡くなり、仕事に家事に育児に、と大変ななかで、食事はすべて母がつくってくれていました。ところが、出された料理に平気で「まずい」と口にし、食事を残して席を立つことも珍しいことではありませんでした。当時のわたしのなかでは、食事の時間にだまってテーブルにつけば、料理が出てくるのが当たり前、と思っていました。

「謙虚さがなくなる兆候」の十四番目には、「『ありがとうございます』という言葉が少なくなる（感謝の気持ちがなくなる）」とあります。何ごとも「当たり前」と思うと、不平不満、またグチや悪口が多くなるのではないでしょうか。わたしの過去のことからも、そして今の状況からもそう感じます。

新型コロナウイルスの影響は、わたしにとりましても例外なく大変な状況です。しかし、一方でふだんの何気ないことを「当たり前」と、見過ごしているわたしに、喝を入れてくれている気がしてなりません。

日常のなかにこそ「ありがとう」や「有り難い」ことがたくさん詰まっている。そう感じたとき、心のなかがほっこりとしてきました。

加来　寛